說蒙大全

春之部 下

蕉翁發句說叢大全卷第二

葛飯　素丸著述
同　南臺撿校

春部下

八九間、空を西へ行く雁かな

袋　云此句八柳の糸は風を麗きかたうらさは八九間を空に糸は降るは柳なるべしと云へり

林　云ひろ西とうやう空のごとく浮て鳴く日の陰りは出る柳糸乃静さは八九間ゆ空に西の陰心地とそ行くかく景曲のそうかはなる戒僧の寿りて世句はなり

[illegible]や[illegible]は句の意味を[illegible]只眼前の日光陽乃[illegible]て面の
[illegible]くと烟霞の風情と[illegible]と答へ[illegible]て其僧ハ梅柳ハハ
九間[illegible]て[illegible]の詩人の常[illegible]ハ九間[illegible]
[illegible]て[illegible]不出面[illegible]て[illegible]

解 此句を出さ[illegible]

説 **袋** [illegible]て[illegible]

抹 面乃[illegible]

[illegible]ぬる面乃[illegible]と記[illegible]却て[illegible]客僧の妄説[illegible]
堪笑[illegible]本據を[illegible]ぺ[illegible]人の句ハ評[illegible]
や籠の句[illegible]や何[illegible]梅柳の[illegible]ハ九間去て[illegible]
出[illegible]ぺて世俗の談[illegible]此句古人の説[illegible]
今年て初筆の[illegible]に記て。○去来抄曰素行曰此句ハ[illegible]

[illegible]西華坊曰此句ハ物語[illegible]
去来曰我[illegible]坊曰吾先[illegible]木曾塚乃舊草に[illegible]て
或人此句を問曰只雅[illegible]此柳ハ白壁の土蔵[illegible]松皮膏乃
[illegible]中校[illegible]ハ九間[illegible]
て春雨の降[illegible]
[illegible]を見おろ[illegible]大佛の[illegible]
[illegible]柳を見て[illegible]猿蓑よ爽乃鳥の畠梅
[illegible]て春雨の降[illegible]
[illegible]去来曰我[illegible]の秋つ[illegible]別墅に[illegible]
[illegible]此句を[illegible]ハ九

間の柳さる風情いかにみうけられしうしたしたもよ
大佛のあらうなるもやけふと中翁うたうるく翁ひ
ゆうりはを俳諧をえる事丈人の胸中を奉慰べきて
二三度もうけ思うたくらんみちとうのやまり侍らし
名宗高達の人とうとも能はなくのきいあしこのうむ人を
又多丈人よ速ふ八風馬に乗ふ人とうて亀しこの説秘
蔵さりとうとも妄注よ初輩のまよいむるを歌き今所
ちうし。ゆう亀ふきうたて。詩人の法ふ云賣僧ハ片
腹いたき事也。○陶淵明ふ歸田園居詩曰方宅十餘畝草
屋八九間榆柳蔭後簷桃李羅堂前とかはるるもこの

ねうくえ亀ゆうふ人みうの大佛の柳ふもりん合されて昔時の
感偶乃吟とうりあうん。唯八九間ばかりのあうさに。而乃ふる
とうて不俳諧し柳を而とえうふ也○清斎云而ハそべて。一
二ゆうれとうでいえうえ拙ふるを。春柳の糸乃みへふ長
夾而ゆうひて又ふるかハ八九間のとあてを。移志うと雨と見
ゆうとつうく見亀うしさ長みやあうんと。此説もまた
拙ふく。幸ふ詞を。

鮮云荘子夢為胡蝶翩翩然胡蝶也毋ふみかうえふ垣ゆ柳

（解。嬌柳とう云出セうも仮名うきよ後一詩文ものとよハ左嬌柳とう云うも後訓ふハ仮名うそよきも也）

乃眠子てゝく糸竹白日永作者皆胡蝶の夢といふに寄る
きを学こと難しゝ八彼古事をもて故事にたゝるをすこゝる
俳諧の荘子なへ〜 袋林 此句を出さん

説解 大に非ず是故事につゝかるゝもの也此句は一脈
る・嬌柳ゆり・胡蝶の夢は句みのうしろ・眠子とゝ〜ぐ早的孫
の夢といふ故事にたゝるし奴也・柳の眠ふとゝ〜ふ人柳の古
夏ゆりいて・和平連俳古今普通也・等比眠子中比の出て
解しざ侍・大にたゝるべし・○又魂ひ柳ゆるゝいたて・
しゐるときゝしゝ剛也・元蓼太・好める河内・元八句
るゆゝ・句選ゆたまに移ゆる・寛享温和詞優美

し・元禄なるも・伝てたまふ眠子を用ゆし・○温叟詩話曰・
不比禁中人柳・終朝剰得三眠・注漢苑有柳如人形・號曰人
柳・一日三起三眠云云夫木抄建長八年百首奇合よこゝ
て記も外れ柳ゆまゝ校乃ちゆゆゝ右近中将具氏卿の作ゆり
又柳と鶯のゆり合せハ○白氏文集云緑絲柔弱不勝鶯・楊
柳風前別有情・一日三眠何大懶・蘇家小女共知名・世詩
かふつりと云んも・糸竹を好もゆゆり・鶯を深みゝゆ
俳家の活法・孫のゆ夢ゆ・世詩の新句ゆり・一脈
して乗の眠を為ゆ柳ゆ・とハゆ・翁の句ま
ゆゝく・白氏文集ゆり・出ゆゆ多・ゆとゆ・例の流

あるりの也。句意はあきらかなり。解あるべし

じゝ〳〵。雅楽。とよみ。五器一具

解 云爽面や裏ゆくらちよ秋早世此中よりて我れ食をもん

と涙ぐむ影ひあり。て頭陀乞食の旅りよ密戒の一句と見るべし

袋林 此句を出さず

説 世解是はうく。鐵を得るに。ひとしかるも。引辛のこれ

て向上の文字あるべき初学の年に為がく。度く人の問ふるに

倦しむが故句解なり。つよは。文章を陽らむ。洞賛まり

正しく注するを。古朱ようの法格しるし。世引学ゆきを

見ゆる又解なくしていかゝ。初心の門生。学ぶ人しる

○此句は支考ら松嶋行脚の時餞別也。五器一具とは。事の

足るを。ばうを寄るを。淋しさをつとるを。この示戒を。花の咲い

世の人ゆを。うきさらに思ひもよらぬ。寄をいでゝて。

雪舟出合浪をもつゝみ。うゝを。一具の器を知足しる事。

去源をいやまるを。俳諧の淋しさを拾ふ。けうゝ

ぶくをつまをず。身に推しまよがして。慎と忘部をな

るをとゝりかくして。深長の味。金情を同うぶきし。

いかゝ人乃家を出。名誉かをとゝ。斗藪の行ぶの。たくしとい事習り

て。俳諧松のひたゝ。行脚ゆかぶ。乞食頭陀の境界の引事

八ぱくそもけうるあやあんとこうれ侍りぬ。

葛城の神のなりけるを

なかえくし花すすき冠の神乃顔

林 云句意ハ眼前にしかつゝ絶の景まれなるや岩橋の渡てかよ
りたらひするゝん岩橋の景物をもつきぬ〳〵あらるれ
しきかつゝきれ神はしかハかる発句の姿あやうしこ **解** 云かつゝ
きれよるの世をり姿詠よりうる葛城の神を美目のうつ世の
人の口さるゝ〳〵侍ハ隠てのハ形ゝとゝ俳諧のおもし
ろゝんをハ共山の京掘みして岩橋ハ役の優婆塞の故事也

説 **林** 引ちきりもたえぬべしとゝ云しかゝ元ゝ書きも
ぢ。くるまかまぢ。くるもにも侍とゝぶべし。又此分ハかる発句
の姿あやうしこ〳〵ハ仏ぢ。又多のうきあやしこ古ゝうり
て。義ゝりを敷まへて。一特し此吟ゝり。何ぞ。ちゝ歌の句をも
りて。古歌よりまんや。此発句ゝかる古ゝの姿よりやと。
侍ゝ。ぶきゝるゝを。ゝしハ世ゝ〳〵絶者ゝて此ゝ。初案
の海よりひす。歌ゝく編ぶ。ゝ **解** 引ゝ一首。れゝ乃
ゝ言ゝて文に尚ゝり。ゝ按ゝるゝこの文字。一句の形貴ゝ。
花の曙のゝやぴやゝゝに対ゝて此神の影形ゝるきとハゝ
の字。俳諧乃活而ゝて。一句の字眼也。甚深微妙也。いゝ。神

を恥うしかりぬべし

よしのみて

山ぢくらうちもらぬく拾まぢ二川

解 云齊宮の忌詞ふ佛をふことゝ経を染紙とゝ寺を瓦葺ものとゝ云事なり世間よりる長ゝ二三の藏王堂を拾ふ

ゝ

袋林 此句を出さず

説 藏王堂ハ拾ふ忌詞さもあらんつまでも齊宮の忌詞ハ延喜式ふ見てそれ寺を瓦葺ものとゝ云ふ

るなり きゝ説を出したり ○延喜式五神祇齊宮式凡忌詞

内七言佛稱中子經稱染紙塔稱阿良々岐寺稱瓦葺云云

山家の記ふ是ハ隱居所の記ふ常ふ住所を瓦ふくりの二川 西大二間とハ

云云此ものと西ふ西文章の手紙なり源氏拾

遺ものとあり何ものとあり拾せんとあり洞幽長也

社長嘯子の文章すぐれたる

うへ ふしのあて冊ふあり一二の堂ハ乃ふみなる中より

くとえッ見ゝうぐ瓦ふくりの文二川とハ中され二ッとも

西ふ見ふくり四ふ見ゝ芳野山へ入ゝとゝ春の雪ハ

ふくゝと一二の堂乃天ゝ目新也ふ拾ふ海しうぐ

詞をあらためず行所黒髪も抽終りぬ瓦ゝ抽とゝ
ゝ忘網よりけぶ。元らも世の詞咎めて此ゝ詞の古歌を
知てゝいかゝ如ゆゑ。神歌の連しに成たるとの。句選み詞古
此句をゝゝ詞古句て歌叶りけぶ

高野みく

ちくさに咲きしみ高し雉子乃尾

林 古歌集よりきこえた悪しとの句の高野の華しの
吟せるよし山るれかろくとゝ此きけく又うゝそゝ無ら
ゝて花りゝかゝ俗ゝもあゝたゝ物や物の尋 解 云良辨僧正の哥

よかろくとゝ此ゝ山田乃きし此歌又ゝやゝゝゝ無ゝゝゝゝ
無詠ふゝりゝる 袋 此句を出さ次

説 林 引哥ゝりゝ行基の世哥ゝりて。塔の良辨。又ゝ哥
ゝりもとゝ天竺。古き行基の方をとゝべ〜〜 夫木抄廿七。雑九。
鶏。ゝるのゝをきて。行基菩薩。やまとりのかろくとゝ
きけと又かくて知りゝ無ゝゝ雉の歌ゝいまゝ天ゝりゝ
ど。○山ゝと雉子と此ゝ俗物ゝ。俳諧乃季立をりて。ゝ
さくゝすゝ。ゝ雉と者ゝゝだゝりゝのゝど。上古ゝ山鳥とゝゝ
行基の此ゝいまゝ物の名も詳ゝゝ。山ゝと俗ゝ。雉ゝ
ゝて又可也。此句全く行基の哥ゝり出ゝ事。所然ゝり。後の

良猟に引用る歌し・古き村叟の云・行基の世泉に為所山
もものこころと・ものがたりぬ・詠ずるなり

悼呂丸

當帰よりのちの塚のすゝき哉

袋 云是追悼の句なり故旧を引て哀しむ・他国にて
く捨ひて故山へ遠志を送るなり是い遠く思ひ入るのし其臣
當帰を送るなり是い當帰へしるべ也をもとして當帰を送
るなりい墳れ堂来の涙なり一入哀なるこゝろ遠きなり事
ものと又つゝ 解 云呂丸ハ出羽國羽黒の蘇の人也翁の弟尾芭

て一度武江の深川に仮庵し共に洛乃桃花坊に越て衣更着
孔初旅中・ものして黄泉の客となる世句なり當帰い唐の孟遅の詩
に蘼蕪亦是王孫草莫送春香入客衣蘼蕪一名當帰此二
字當帰と續く夫の旅しめるを送ふ閨情の詩し変れ當帰の二字
を抽るものなり又楚辞九歌曰悲莫悲兮生別離樂莫樂兮
新相知けんを指して當帰のなを悲しきいなりいもし死別な
丈なるも哀しなる云句意なり董仲い塚よ住くいを指せるなり

抹 此句ハ出ル

説 袋 當帰遠志の出不・仏れ為ものし・花苗なり・花なるい
なし・去那なり・此句ハ呂丸を悼む・句なり人事を知ぶ可惜し

解 當帰の詩一句面白し。国情とは、さう〳〵當帰の引名なり。
よろず。又楚辭を引とは、いづれの追悼死別の句なり。用ゐ
らるべし。當帰は、きの引き名とは、全文の義、用ゐ侍りや。
釈家には、空〳〵帰ふ事の心よりて、入りかぶ解しきるあや。
けらしたる侍りいで。離別の悲さよりてる。さべきすあや。
桃花坊とは、初巻初〳〵あり。そは解らしてはずえ侍一条
の旅宿とは、さべきすあや。○桃花坊は京一條の坊名。東を桃花
坊。西を銅駝坊とは、町の名也。奇くは拾芥抄とえるべし。又唐詩
をいとゝ。是はいとるに。はの世も詩ゆ。いづあや。惣の故す
ぢ引用る歟。最初〳〵をを引用る義し。はのみ并詩編。

證とあるんや。さはのもぞ。○類説曰姜維諸葛兒得母
書令求當帰維曰但有遠志不在當帰おぼしくは此説
を出所ともぞきも也。○故実を引てあるれむとは、あ説とも
わるしぞ。唐ふも。呂九ぶごとは。地國とも死を人の故すは。ふ
いと尚かし。さ事を句く載入るとは、そは只遠志當帰の
二種の薬草の名を仮りて。りとよりおられて。元合せて。風流
をつけ。當帰を董よ一移して。感情を添へ。を人を悼むとして
下るんん。又旅中に死るる人ゆえに。生別死別のをを引て。解せ
ふあや。長ぶいるぶ也。塚くはむとを。すみれよとうけ。弟編とは
合をて。いよ〳〵慊む錄情長し。董を仕ふも墨ふも。以詩ぶ

月ふい和ゝ也風數。俳諧ふい學うして。却て。無品一也とそうる也。

○白氏長慶集云。古墓何代人。不知姓與名。化為路傍土。年々春艸生。是らの併より來ぱ。神佛句也○句意ハ出羽の守司呂丸。旅中に。あつきて。絶て一堰のりたに。行し人とうるぬ。近き所ふもとのうら。埋て遠き境ひ乃人なれば。當帰の名を。今ハ宗しく。董のゝ生ひて。墓のりたに。すむ人とうれうと二茶ハ古句を拾て。風流ハ俳諧ハうひこなうる。名人の手段也。故に人くちさがなや遠志のふげきこひやゝ侍るも也。先と人情とうるや。

り春を行くるの人と情こゝ侍

袋 云此句表ひきい春を近江の人とこひ句也情こうるやこうひ

ふうるうさいと類て湖水眺望とのふて武藏野を出て羽之奥

ハ奥江戸て面りての句し去度ハ侍ハ出い東都よりて奥なる

ひさしの人と情こしうこうふ近江の人と倶て奥を

情ひよの作也ひ句面て切字又て大概ハ大過しなるこうる格乃

やうのわるも句中ふ懸なる切字乃句り數多人のうたりうと略て

林 云貴之辛て又も多ひ侍こうおりと面のまきあ我才ふしの也

ハ情き妻うあかり侍ゆうりやこうるうひ乃句侍き妙也可

考こうるや 鮮 云翁石山寺の奥幻住菴ふ立こうこの門人

茶と春を情める湖水の眺望こひ句を情こうりと出侍集句

是一句の情なるといもさいなる立様云云

説 袋 注一向なる所なし。兒童のものいひぶり。林 引句以ても
なるべし。古来よりの三月長れ詩歌を引合うんよいづれの情奇
なれども。春を惜まるゝやいかゝ。翁の句でなに。古今をひるむるい
うべし。おのも海ぞるこゝろし。解 幻住庵のその吟といへばいまだ
廉素也。木曾塚の。菴うしろの吟に疑ひなし。（尤も記を係セズベシ）○去来
抄曰者を尋ねて昔をかるる先師（芭蕉一の證）湖南において別墓を近江の
人と惜しげるとゝ句ほ大津の尚白ら深く別墓をあるべきの人といい
うんも別墓を丹波の人というんも同じ事なれば一句うりうる
ものゝ去来沒いうふと作らるゝを尚白ら言よりす近江の人と惜しげるとゝ句ほ大津の尚白ら深く別墓をあるべきの人といい
うんも別墓を丹波の人というんも同じ事なれば一句うりうる
者又近江のものとなしりとより世話向うかゝまゝ嵯
峨場こゝろ多をもて中さるれい去来沒い風雅を深くきりのし
と感賞こゝあるを其場こゝ事を知るべきもとゝ云云○支
考ら古今抄云発句の句絶ふるものを不波ふ句をあるこゝを熟
名ゆゑ大回しとゝ云云別墓乃一章ハかの（是オ二の證）木曾寺の偶作あるく
本名義仲寺也
世句ゝ例の句を色をこゝ情こゝ決定しこゝ平句の雅も通れ
ゆこゝ小こゝ情こゝ多風不河くこゝとゝ不波ふ句をあるこゝを句
外の意味ゝ多風也実に句ほ移ゝる所いりを通ふ句と

鎖詞の法かゝる辛崎の翁詞より句ゝ句ゝに知て俳諧の始節とも
云へきゆゑ去ものゝ世大略格の常蛇の法れ以ようして当通
の人おろそかなきをと云〇路通ゝ芭蕉翁行狀記云元禄十七年
文月十日ゝ色て去りに父母の骨も埋ることゝ弟子
氣旅ゝ風の骨ゝとゞりめ桃風のこせん方ゝと歩多し
又伊賀乃国へ心さしゝ乃とゝゝ（是廿三の條）栗津の庵ゝ立
寄たゝくゝ中ゝ日ゝ（説）はらく拂ぞゝ。往古木曾寺ゝ
翁の卅居あゝて。義仲乃墓とゝゝ以せ和てぞあゝけゝ行
引とゝゝの去来抄物の句添ゝ（是廿四の條）木曾塚の舊卅とゝゝ。木曾
の義乃居の。茶移ゝとゝゝ事也ゝの比の吟ゝ　木曾どのとゝゝ

あゝ色の未来ゝ。とゝゝ以ハ即ち庵也。翁滅後。丈草ゝ住ゝ。
夫ゝ死て後。南の岡へ移して。一人の乃者すゝけゝる。そ後寛保
年中。ゝの居主咄道和尚。造營して。今ハ黄蘗派乃一宇とぞ
なりゝゝて寺号ハ乃ゝゝれゝ。爰ゝ後世ゝゝて。
ゝとゝゝる事ひゝゝ有。寶暦のはじめの年。雲裡坊。杉
夫。発起して。かの石山乃奥の。幻住庵のかゝりに。植の樹を
ゝりし（ゝゝぞて色あい植わきゝゝ）はゝび移しゝゝて。翁の高地へ。又ゝゝた
ゝ居をつゝゝて。是をのゝ幻住庵と呼。（木曾ゝる中ゝ）今翁の石牌
とゝゝゝゝて。是ゝの来歴ゝ知ゝ事ゝ。さて世ゝ本ゝ
寺とゝ。非ゝ。翁滅後のゝゝ。ゝゝゝる多ゝ。今ゝ世

の時すでに世を隔てしはり者の吟も此庵の事なりけり
此一体は義仲寺の住職なる人雲裡坊と親しく同居せしが
武蔵なるべしと深川に住名は陶雅梅月坊と号し陶雅子に
もかなるまし其證跡ゴーしかれども実に記を支考の木曾塚
偶作し記を疑ひなし是第五の證○湖水眺望の題に
つきて一ッの師匠略を（是第六の證）石山杉くの幻住庵は紫式部が源氏書
かしし所なりと遥に一里も余も山杉くの生ゴイ乃
又遠く杉くあるを陶雅子き又源氏の間を云ふ湖水は
又遠く一里ばかり山の岨へ出て舞臺有そこは湖水遠く
望けて風景殊勝なりと此へ出く此こはあらの巻乃頭に

うみなるべしといひし木曾寺は湖水遠く見へて
は市店も稀なるは湖水を見るに堪ずの吟疑なし今は
市店赤くさうえ見へて湖水見あはせ陶雅は行阿水抱
清水より夢を石山奥幻住庵なるの作とゝ云も全くの誤也予
六箇の證を出して訂之○清斉なける苗の事先達の説を
擧られしかども和辛なれども連歌なれども上なる云
抱字なくて必しも苗ならず苗は上なる云
なく苗は鉢なる苗を云なり苗は苗なり
上へ反つて苗なれば反らぬ云事いまだ見ず云ひ流
して句に付て面白く思ひ出る也此句大回し此脇あいなり

なりと云説しの解なし。いかく面白きといへり。予按ずるに此
是を以て、おほくの人々ゝ、情を尽すと云心なり。是は一句の中ー
にこめし意を見ると思ひ侍らぬ。さすがに又けるもの然に。
最初はたゞちめて、須く支考なども評美して居るなりと済ませし
知べからず。然るに此むつかしげなるは、最初の文字なりと須く文
者なども、ものべしとも出せし類ひ、ゆゑに此句は此句のけるなり。
立たぐひあやしも知べからず。大まりしのみげなるも此句は思ひもぬりし。
予もおもひしに是ならじ。心を留めぬ心切ともすべきにや。先達の
意押て知がたし。○句意は古今抄にいふごとく、心のおひさるし
人と、善悪を情わよく分地人と、いひかけて、余意なく済みぬ乃。

風景をもてあそぶもの。予それ存かう終なれば、ひきよく去るをいはと
そのまゝにまうひしかけるをや。且日も俳友門弟などゝいひき。

蝶乃飛ぶばかり野中の日かげかな

【袋】云是野中の日影に蝶の飛揚するは、なにとなく我腹をいさゝか似合
の挨拶也。我山野に吟じて胡蝶の余意を書む。まくの生涯をなし
幸此人の情わかれたる人は野中に日影に蝶のふるまひなしとせんき
挨拶也【林解】此句を出さず
【説】此注又甚し邪妄。正統の解にあらず。むかしよりつけたる。邪
推也。初案のまゝに端をひろぐ。遂一にあらず。後の害とも成がたき

きハ接ぶとを記す。○ながら接ぶとなるなり。あるこ妄し。慥なる
説跡なし。是暗推也。又跡を我ふたりとなるなり。入りなぶめし迂遠
也。さなりんあい。一句の仕立こ。かぶばうりみしハ。ひらぶ。列こ句
作ヲなるなき事也。○按ずるに。笈日記ふ元禄七年夏の
五月尾張の國小入巴丈亭画讃四幅三聖人圖盤斉背面の
像菊花の蝶題二句雲雀野中の日陰とかりて句と五ばりこそ花い
ぬ也ぬき見えはりそうぬも花ぬ
證なり。芒暑の日乃句素也○句意い惟。世ふふ。ふ。ふ。ふ。
為宋句。春の日ふ。ぬ。世。ぶ。ふ。の。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
因ふ。ぶ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
う。所中此日陰し。ふ。迎ての句し。九丈の眼ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

ぶ。略ふ渡ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
ふ。○澹永云此句ふ。ふ。夏ふ。笈日記ふ五月ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
夏乃詠ふ。句中ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
日陰ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
五月ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
炎暑の情ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
に春ふ入ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

茶ぶ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

茶

云此句小吟ふ。

一箇の業烟因斎氏百ヶ年を廣き世界と知るべしと生涯を
送るべしとなり業烟は又新古の非をうつ
るべくの句也 林 云和歌の道は高尚なれば凡俗の
無学なる輩は西行のうまれ変りと詠ずる歟

説 是又むかしかくうつせし入唐ぐるまの翁の句ぞ
親恵ぼうし雪ぐ舎きや句選ふも其外の諸集も吟り
の類ゑぐ是亦海の人のうら人類なるべし句をして新
をうりて是るい神仏の業なる許し翁が郎
無感偶の句あまたなり初単独事をうりて小屋をうず又
業ぐらけを天地をやとんずる徒をうしかい何ぞ

たるべき名と雅を知りるべしや安心をうるべきなり
きるべきかと仏法やをしべして是たのしく清貧也をうよ
雅を知りるべしといはば修行の文脈叶ひ業相なる任
を知るべし言語始終貫通をあし 林 業をうるべし許六
宇陀法師よりつる所一字をたがはぬ杉雨が説めいのうつ許六
の云やくるも出べきを古人の流を盗しい心黒きをうふべ
あかきる 〇句意をあきらかにうるべし注を入るべし句あて
雀の居ぐるべ是ぐるべ是ぐるべ

梅ふるきのよや鶯をぬすまれ

【賞】云此句題し梅林とあり然まこは梅の白く咲て雪を
雪を好む林和靖と云てもかはあらぬ雪もまきれつなるふ鶴
の中のなきいきけりやや鶴を盗まんかと訝る能の句作也

【説】梅林の題句選みもなく。雪外諸集に入りたれども。そも梅
小好事の人乃添るものなるべし。世注に素樸なりて。のびわら
○太来抄曰。古歳集に。此句をあげて先師のこゝをみしる
しもそなるべし梅の白をもきまへさる羅し世句迎送のいとを
秋風に洛陽の富家よりまれに市中を去り山多く閑居しる
詩章をたのしく騒人詩をすると雪にむつらをこゝに
うをに風雅隠居の人と思ひ給るなれば作なり先師の句の侍

謐なし評者のこゝに侍ばかりを生のちはく招けるもれ給を
詠よ歌くを一知ひ又句時代拙なるきい尊代乃
風し子亥一巡の海涯とい格なるべしと○筆談曰。林逋
隠居孤山常蓄兩鶴縱則飛入雲宵盤旋久復入籠中
逋常泛小艇旋西湖諸寺有客至童子出應門延客開
籠縱鶴良久逋帰常以鶴飛為驗しけ故事を如まえて活の
秋風を林和靖とすべしなるべ句なし今日秋風を招の意味
なりて入りむ梅もさかりの不宗岳のさはなるはるの際はかも
かの林逋のたくひなるやなるべ去なるべ鶴乃入りもの
きけりなるべ鶴を盗まんかと奥也秋風を林逋に

はちすはいと方の事なく、うのはなさしを霜とよめる
さくなどは不肖の上なれどつくづくきい風雅なれば
りて風雅なつよ論の説もうきぶ移ちやくよりて出さるの
し我とこそなれどいやしく拙者のいらしよくく彼の風雅
ふ拙者人ろ思て爲

やまぶきてはやうゆくし蓮草

袋 云此句大津（出る道山路強てとるべき所の字眼也と定め
るるハなきと打ふ一董の説山を出さる旅の句あてゆし
らし余情説りと

林解 此句を出さる

説 此註ハ非也大津（出る道山路強てとるべ所の字眼也と定め
てもの也文義とのるべ箱の詞ハ此ハ書
爲ふ例の註者いくしらへ事なるべ諸集よ云る不知し
○去来抄曰湖春云すゝハ草ハ山よりまぶ也ち俗歌湖春
巧なりとへども高雅なきの也と去来曰山路をすみ也と
みる流行なり湖春ハ地下此歌道者也いてのかくハ非しら
也けむ芭蕉ちしとき○董菜山路を称格と定ちしるべ
とはるべ所ものふをよむしと言よみ近年きぶ万葉集ハ
山道赤人ばるの所に須賀後つをみとう我ぞ所をつしを
一枝ものふうり堀河院御時古郭百首匡房もるの山路

のつかすもれかすしかこ入れの除くんすみれいろのむのかさら
大工のりり墨入よ似ふい。つぶすみれもつふやうべ。○或老人
のこけ句ハ箱根みての吟と。然もども笈日記よ。悼芭蕉翁。尾張熱
田連の。文章ありうのうにこ。此蓮茶宮ふかりしハこの海よの草
鞋をとても笠時雨と。仏をうぶめ。白鳥山よ掃をうしい何やら
ありし堂卅とるし。ちうこ。かくのまぶ。箱根の吟めしいり。熱田を
遠茶山とうよ多き眺え。○紫をゆうらのうとうぶゆうしこいむ
とぶまうら成ぶし。句意い袋に入るあるり
人をうあ春や鏡乃うらの梅

袋 云卅句鏡の霜乃梅の句と入るうさいれ我此れ徒を入れるる人も
なきハ年貴鏡のうち此梅のむをと鏡ぶうい。のまと都て世の人
此鏡の面い入れかうこ。ち梅い入るる人もなきてく世ふうまを此
うの句ありて 林 云芭蕉翁よ月やのうあ変やむしの声かあ
ワの光ひ入りうの多めて人うあ藪の梅此清香鉢文に句し
こ旅う入れおうう三人ものもうまをしうて安きれを梅よ分をようて
へううもさまとう鏡の月乃清夫ろハ金殿楼閣の遠みもおくしこう
臭亭式よ素堂隠士のけ句此安い人を沖漬の山ハ紙ーと入るるの
けくきに似うるよ蓮二う説こ予月やのうあの奇を今とて主如の体を
鏡こるして附添ふ入るて 解 此句を出さ似。是い句意あきうかよ

なれば。解にも及ばぬ事なるべし。

㊒説 【袋】の注。鏡の宿乃吟とハ入かへ也。又翁自己に。徳よきあがる乃名。慕ひ侍れどもかし。なりてハ無徳也。人に知られずとしても。なにの根あるも。けむきばくもなりて。さる人の翁てあるべ。安住の楽しきあるゝ必不可用也。【林】一流の文芳ゆかしけれ。例の口中に含糊めくし。始て月を鏡とし。藪の梅を。月の鏡乃うちとみへるはあなきもつくしく入かへ也。竹田のかくれかをみゆるところす。不可信用。又月やなしみの奇を引て。古への月を鏡とあらハ。あさき所らみゆや。けむ一句みなゆるべ。旧宅によむしてこひやる卉し。書やの三字を。五月ひかりてみや。くあれば。又貞享式を引と云ども。なけ略文

尓ていは句讀のす。初筆の耳よ落ど又金殿樓閣の選び字何きの字あや。撿校もせず。印版兼末也。又け句の姿ハ句讀也とハさらにいなかし。姿と句讀とハ。殊なるたぐひ也。文脈一つにして正き所をえると。神業を。述らすの媒なり。○句讀 再按増韻曰。凡經書成文語絶處謂之句。語未絶而點之以便誦詠謂之讀。一句の中長くして。息の續かざる時をぎるを云。○支考が古今抄のうち。貞享式と曰。句讀の切レハ。押字抱字のまぎらはしく讀みよりて。むかしかんみハ云ひて句讀の別名も云たると今かく一名をとへるふ世俗ニ心切の類ふとなりす大和す讀癖の故實とハ云ひしかも句讀の類説にはあるらし

故翁の発句に

人もなほはるやかすみのうらみ哉

と云句いうりゝ人を初淋しのとよりけるの句讀より此
うよひ感情ハ咏嘆の吟奪よりてと素堂隠居の涵養に
しゝ思へと句讀の冥合めして変に跡識せるゝんや ゝゝ○
さてはうりゝ人なのようやいうりゝ人をせ切りて初
淋しのこれんしもげしかとといのゝものをとゝふまでよ一息
に讀ひ毫し一首をゝ口ふ息ゆよむかりゝめて よゆゆあ
さやに考奪詠歎もとうるとゝ古人も深し重ハし也
此句もゝごとく人もなほはるやと切て読のうゝ梅と二ロ

よよむ句讀也かよよふよよゆばゝ句の意をつきりとわりるゆ多
素堂もそゝたらゝ毫てゆさ引也 絶ゝ考へ味ふ毫し 説
三考ゝるふ俳句に句讀の名目古へよりなきる也全く支考ら
作ゆし道を弘ふの一助ゆもとせしゆ去ゆ浮世の好変
の人毫者にすゆて あるとゝなるゆ法格を作ゆ毫ゆ支
考を的とするとゝなるゆ千梅ゆ論せしゆく弘むゆ
支考ゆして害ゆるとふ支考ゆ放ゆ 此句のやハるをゆ
ゆ古法にて云中のやゆ也と知ゆし更とゆゆあるゆ句讀の名
目を除去せし伝ゆ句讀のお名ゆ云ゝんと 云て已
ゆ罪をゆのゆるひし成ゆ ○此句意ハ在ゆの人ゆ云ゝゆ者ゆ読

のうしろに鋳つけし。梅とおなじく女し。鏡のおもてなるらむ。あまよ
ばひの人にもおもはれて。澄しかるべく。口惜かるらむと。やさしき乳母の
かゞみを比しての吟や。されば其心は梅よりも一層々清潔
ならむかし。又ただ鏡の裏に鋳る梅は人知らぬ春なるものを
ものなり。自己に推てさらに心むつましきかなや。藪の梅すらに決
ゐ不常也。○鏡の裏の模様の事は源信明家集にもなしのかゞ
みとよそへて所にも有けるにまさし伊勢が家集に鏡のうら
小鶴のかたを鋳つけてまゐらすれば。ふたりせりもなかにぞ祈らんと
みちのくのあかつのうへをぞ見るべかりける。今の後段のそのはかすも年
経とせしけりしかはかりかねこの意ぞくかゝる人ありしはよし。鏡裏

の花を見ずやはひやりしさは古例より又梅花鏡とて。古物にまゝ
に梅花の形を鋳しも有るのみなく。後のがれたる古鏡にも此あるべし。

京中や物にもつかぬ雲雀

解 云 但し下巻附録ニ出 紀日記に云 むかし京にてありし那百公の歌につて
ともすきしんぞきこしてよんしにこりて再業乃於背ならず候へし

説 笈日記 下巻 云 京中や物につかぬ雲雀 夕きの野にもつかぬ瓜の花

此二句は西行の哥に心性をとまり候といふことを題にて人へよき
やう行歌 雲雀さかけりて野にある那かのにもつかぬきこゆる那 此哥をとりての吟也とあ
るべて。古哥を引。用句にはよきへ出るもの恒例也。能り徳ともかな。

近来の古歌雪うせ[illegible]ゆるとぞ[illegible]
今改笑日記の流を[illegible]て初葉に示とのゝ拙句をつぎ[illegible]
ひさ花の形容日[illegible]夕[illegible]
ぞ[illegible]也

増補

さびしさやひのあたりなのすなごろも

(説)世句の前書世人の知る所し○清水納言記一名枕草子本ハ[illegible]
ハひの末ぜ世ちくも[illegible]実記清水嶽[illegible]
[illegible]ふくぞ[illegible]何の心[illegible]

[illegible]
らまりうおりしと云○彦根孟遠ゞ桃の枝菊阿口伝ふ云ぜあ
すハ檜のす清水納云枕草紙ハ[illegible]世俗ハ[illegible]云本也
檜ハ以て材用ゆつよりもし吉野金峯山ハ[illegible]世人よく[illegible]
事や[illegible]翁の句何をもて曲とする所を[illegible]
のを云出[illegible]ハ[illegible]翁の句と[illegible]何の[illegible]
く只面白き也[illegible]芭蕉[illegible]
[illegible]本書[illegible]事也許六滑稽伝云季[illegible]
[illegible]翁の句[illegible]
合と云花よ[illegible]世句花の[illegible]

紙面清水納言より部ゝ句清き撰集抄より出ぬ撰集抄
ハ中務元輔の扇の事二首よ[illegible]ふよ[illegible]ふ所よ[illegible]扇婦[illegible]勝ホ
定ゆく[illegible]の[illegible]扇[illegible]の[illegible]の原山[illegible]
[illegible]人[illegible]一句[illegible]
[illegible]口傳を更へし[illegible]師説也と云云○句選よ[illegible]句の[illegible]
[illegible]日ハ[illegible]
[illegible]人[illegible]と記す説此句意ハ前書[illegible]
[illegible]翌ハ
寛優よ[illegible]
直なる[illegible]又日ハ[illegible]

の日も[illegible]
[illegible]句意[illegible]
最初の吟[illegible]
風骨[illegible]
[illegible]場[illegible]
[illegible]略[illegible]○今市店[illegible]
[illegible]

元日ハ四角の日[illegible]

説此句諸集よ元日[illegible]出ぬ講[illegible]信及の[illegible]山[illegible]

みて。翁の短冊に。元日はこれる中。高塚集に記せり。又同邑の岷雪。翁の自画讃に。奥民の友へ。りとあ送る。芳句も元日はこれ行り。波雪みつ〳〵。石摺よりて刻して亟げり。四ごとに月は信濃国更級郡。の月れ名所。世の人のまねく。ふる事也。○句意は四ごとの月を思ひやりて。元日の神日は。四海の旭をこそ。見ほ。人命をかぎ[illegible]。書写の誤は筆てかゞ〳〵ふ〳〵〳〵。

(説)世よ云ふ能頃と翁と連俳の話あり。

連歌　秋風はすゑ枕をきちるゆふ金ふる

俳諧　秋風はすゑ枕をきちるゆふ金ふる

是もれ[illegible]。元日みと。好夏の人さ〳〵[illegible]。元日はみとの[illegible]

ざれば。は句面白うぞ。はこれ〳〵ぞ。元日一日に限るも。又はこれ〳〵ぞ。連歌よりあり。よこれ〳〵ぞ。俳諧ふ[illegible]。よ[illegible]。右の[illegible]の句

峯崩の信濃蓼を無門峯
中も出して口信こそ濃二口読や

芹焼やすゝ海の田井のこそ水

(説)孟遠ぞ。桃の枝ぶり。十句は峯白集より。元出されり。すゝ海の田井の芹とよふ。一集の内より二所より出事を云〳〵。すゝ海の田井は。山の裾よりの田井也。又筑波根の裾の田井とよして。常陸の奇名所也。出より。○笈日記下巻云。は句は。初芹こいつまを。云〳〵速こゝに作らんと。尋けれは。只こゝひやりこそ。発句とすりこと。翁はあきむ

きよさうが俗いのやまうも。ほみをへ。謡り梅の田井と。紀ようも
いり。そへ傳寫の誤加千とうを。○堀河院御時百首歌紀之貫重
わきもこうすて梅の田井より引つれて田子はまのくらるる苗ぶ。
よあうし○文字。芹摘やと。紀ようも。謡曲も。芹焼
ハ。すて梅の田井は。神水ろくうとうも。芹焼みしてて。一句
乃姿を備ようり。

日ようをみやこの。ぞうようも孫せうこうみち
ようし聊の俗ようる人みだうり侍たこのくるる
みちのわくろくゆくうの姿をうひきと

ようとも〻へやぬの中なる梅も

説 此句。諸集より。わするるなと。作出し。句選みも。門人何う
みちのくふりるのうもわむきしてうを。何ようを出と。深川。古杉風。
而指の一軸あうて。今の杉風。秘蔵うると。云てたひ閑うた。翁乃
三跡あて。四季の句ようり。粗今世と。侍ふ事と。たぶひ侍ようり。よて変
ようし一出て。句選の洞ようも。推量みと。侍の人乃うらうくる地と。又
ゆき。所にたぶひうり。さいぶうとかきうとい。翁在世ふ沈一砂一歪
もしかいさのう證跡とうりぶう。先ようを初書きうる也。又侍ふ
ぶうさうとうし人もうぶ。文ぶ。たしかうる沈ようゆき。ハ。推量

の法語し、又許六が去来抄とかいへる雖しかれども翁の文
通ずるまでなり。及古因元にせし時、今とかくして七十餘年、去来
と流とせずして、何ぞ澄とせんや。やがて是は再来を思ふ来
るの事、清徹の句、等閑に聞るの外は流といかしがたし。
たゞ、怪の人なり思ふべし

物皆自得

もろふのそぶ蚍蜉なりけりと友雀

説 袋林解 もとより此句を出さず。遺恨也。ふるこゝろをもつて
此句のふうぜんを、すこしもあらん。古事の如まんもはかりて

説ずしてしれば、かゝる句也。何とぞ、評せばりうんぶし。
今爰に挙て、香の軸とものもの。老子の無為の化徳をもとりくるる。
翁の閑中を感慨するふうのこゝろ。○戦國策曰、呉王欲伐荊舎人
孺子諫曰、園中有榆、榆上有蟬、高居悲鳴、飲露、不知螳蜋在
后委身曲折、欲取其蟬、螳蜋亦不知黄雀在後延頸欲啄螳
蜋、黄雀又不知弾丸在其下、此三者、欲得其前、不顧其后、王
曰善哉、云々、此句をもつて、世人の我をたゞして、彼が誘ふこと
いまだあらざる句意也。翁在世此は、古風也。俳人、ほくの風躰を
ぶりて、翁を、そしるもの、流言のまさりけるに、此句意は、
風雅にいつはりなく、風雅をもつて、自身をうかがはずんばうるし。

彼を称するに、もとより、ひとつの物、託をあり、何ぞ、ものをもて、彼を
愕ることらんや。世ふる、友唫人を、雀ふるし、彼
託をもて、風流を感深し。近代風雅の人、我言を乃て、五
よしみをもとめ、ものみをもとめ、ものの託し雀し、あらず害を
むるいうふるや。風雅部て、域部の世ふ、ものもとめ、意体玄く
妙々、無為の徳を、うく修しる。翁ふ、なし、かの句を語
ものして、時代初学を、導くのもし、うけべきべし。ら
今、ものの物を述るもしとのみ

春部下終。　以上　十有九章

蕉翁発句説叢大全巻第二終

1